

## 0-1 石巻市雄勝町大浜

2012年5月13日(日)

---

報告者名	相澤 卓郎	被調査者生年	①未確認(男)
調査者名	橋本 裕之	被調査者属性	①不明
補助調査者	相澤 卓郎		

---

### 被調査者(主な聞き書きは話者①から)

- \*話者② 生年未確認(男)
- \*話者③ 生年未確認(男)
- \*話者④ 生年未確認(女)、話者③の妻
- \*話者⑤ 生年未確認(女)

### 調査経緯

昨年11月の調査は、主に大浜地区の春祈禱を中心とした調査であったが、調査後、大浜地区に住む話者①から、春祈禱はあくまで一部であり、女性の行事や大浜で1年間に行われていたそれぞれの年中行事について聞き取りをしないと雄勝について理解したことにならないという旨のご指摘を頂いていた。そのため、今回の聞き取りでは大浜地区で行われていた年中行事について聞き取りを行った。

### 大浜について

調査地となる石巻市雄勝町には全15の浜があり、それぞれ異なる気質をもつ。それぞれに、その浜の気質を表す言葉が存在し、たとえば大浜はオオギサシと他の浜の人間から言われる。これは威張っていることを表す言葉で、その他にも立浜ではジャンジャガネ(にぎやかな様子を表す)と呼ばれたりする。他の浜を揶揄する、悪口のようなもので、普段はあまり使われることはない。

気質のみではなく、生業も異なる。大浜の場合、生業の中心となっているのがギンザケの養殖である。2、30年ほど前から行われるようになったギンザケ養殖は、大浜における年中行事を変えることとなった。仕事が忙しい時期に行われる年中行事は、日にちを変えるか、あるいは行われなくなった。

### 大浜地区の年中行事

震災以前まで行われていた年中行事について、1年の始まりである1月1日の行事から示していく。なお、調査に当たっては東北歴史博物館(2005)『東北地方の信仰伝承—宮城県の年中行事—』を参照している。

#### 1月1日 元旦祭(歳旦祭)

10時ほどから各神社に氏子が集まり、宮司が祝詞をあげ、1年の安全を祈禱する。

#### 1月4日 トボサク・オフクデン

氏子一同が葉山神社社務所に参列し、今年1年の漁の守護を祈願したものである。トボサクに関しては、コトフギサイとも呼ばれていた。

#### 1月7日 どんと祭

この日、浜の1か所でご神火と呼ばれる火を用い正月飾りを焼き、その火にあたることで厄を落とし、一年の無病息災を祈った。原則として男性のみが正月飾りを下ろし、焼きに行くことになっている。多くの場合、どんと祭は1月15日に行われており、大浜でも同様であったが、いつからか8日に行うようになった。その後、大浜でギンザケの養殖がはじまると(2、30年ほど前)、8日の朝はギンザケへの餌やりのため男性が手を離せなくなってしまい、行事を行うことができなくなってきたので、7日午後が変わった。なお、葉山神社の現宮司から数え2世代前の頃までは、宮司がご神火を持ってきていた。

#### 1月6~8日 シシフリ・ハママツリ(春祈禱)

獅子舞のことを指す。集落の西端から順に、獅子の後ろに神主と総代がついて周るかたちで各家を祈禱していく。道中、「ジョウノウチ」「ミヤマル」「ヒガシ」「オオヒガシ」(いずれも屋号)の各家がオヤドとなっており、そこで休む(春祈禱)。各家では、獅子の通り道に砂利を敷いていた。これは、後述する棚経も同様である。

このようにして集落東端にたどり着くと、浜を祓い、着た時とは逆の順序で帰っていく。帰りの順序では、各家で酒などがふるまわれた(ハママツリ)。現在は、各家を周ることはしておらず、浜の2、3か所で舞い、それでハママツリを行ったこととしていた。また、オヤドも上記の四軒から地区会館一つのみとしている。

なお、今回お話を聞き出したうちの1人、話者⑤には、中学校を卒業するまで獅子頭を恐れ、祭典当日には獅子が来ると誰かにおんぶされてその場から離れたというエピソードがある。

#### 1月8日 サイノカミ

サイノカミとは、集落東端の岬に立っていた、大きなケヤキのことを指す。シシフリ・ハママツリと同時に行われ、集落の境となる3か所にお札を立てた。かつてはカミオクリと称してこの神に対し、甘酒を入れた竹筒を備えていたが、震災直前ではお札を立てるだけとなっている。

#### 1月12日 山の神講

かつては旧暦2月17日に行われていた。10月17日の観音講とあわせ後述する。

#### 1月13日 ダイハンニャ(ハンニャサン)

股引きを履き、着物を着て、全600巻の般若経を6つの箱に入れ、それを集落の若者が担ぎ地区を歩き回る。行く先々で、各家の縁側から入り、同行する龍沢寺の和尚が各家の神棚を拝み、玄関から出ていく。シシフリ同様にジョウノウチ、ミヤマル、ヒガシ、オオヒガシ(いずれも屋号)がオヤドとなっており、道中はこれらの家で休む。屋内に般若経を入れることから、ハンニャサンイレと呼ばれる。現在は担ぐ人が不足しているため、般若経は300(3箱)に減り、また、家に入る際も、家が汚れるからか玄関から入るようになっている。近年では更に、玄関から入ることも困難なため、屋内に入らずに回っているという。現在のオヤドは、春祈禱同様に地区会館1つのみ。

#### 2月1日 コショウガツ(小正月)・トシカサネ

各家で餅をつき、お供えを館棚や仏壇にあげたということだが、コショウガツは行われていない。かつてはコショウガツを迎えるにあたって、カツノキにてコショウガツの際にふるまわれる料理を食べるための箸を作った(イワイボウ、ハシ:1月13日)が、これも行われなくなっている。なお、イワイボウが行われなくなったのは約50年前ということから、コショウガツを行わなくなったのもこの頃だと考えられる。

また、1日にはトシカサネという行事も行われていた。これは、男では15、25、42、65歳を、女では9、19、33、62歳の厄年に当たる人間が、カミサマにあげていた丸餅を小分けしてシムルイに配った。また、ヤクドシノオマイリとして、葉山神社にお詣りをした。この際、厄年と同じ数の硬貨を神社からまき、子どもたちに拾わせた。お金を拾ってくれる人がいないと、「悪いけど、おらいの厄拾ってください」と電話をし、神社まで人を呼んで拾っ

てもらった。こちらは現在でも行われている。

#### 2月15日 念仏講

女性の講で、大浜と立浜から計20人ほどの御詠歌隊が龍沢寺にて念仏を唱える。ハナマツリとも呼ばれている。大浜・立浜の2つの浜から出るのは、どちらの浜も檀那寺が龍沢寺であるため。20人の御詠歌隊は固定されておらず、各浜内で都合のつく人が参加した。食事等はないが、終わった後にお茶のみをした。こちらの講は、山の神講や観音講のように各戸ごとの参加ではなく、女性は全員参加であった。

#### 旧暦3月26日 石神社の祭典

『東北地方の信仰伝承—宮城県の中行事—』によると、この日は葉山神社の神主と氏子6名が石神社にて祈禱および参拝を行い、その後社務所にてナオライを行ったようである。今回の調査では現状をお聞きしなかったが、祭典自体は続けられているようである。

祭典は3月と9月の29日に行われる。9月の祭典では、同時にコマツリ（後述）の祭典も行われている。

#### 旧暦4月8日 葉山神社の祭典

葉師様と呼ばれる、大浜の鎮守葉山神社の祭典であり、ゴエンニチと呼ばれる。12年に1度の亥年のこの日は、本尊である葉師様のご開帳にあたり、この時雄勝法印神楽が披露された。20年ほど前までは12年に1度の披露であり、当時は前夜祭から本番までを含め3日3晩披露された。その後少子化や若者の雄勝離れを受け、雄勝に愛着を持ってもらおうということで神楽舞台を作り、2年に1度の披露とした。そのようにしてからは、3日3晩の披露はなくなったが、1度だけ、夜にも披露される機会があった。2010年に国立劇場で披露された時、その練習のために神社の拝殿周囲の壁を取り払い、そこを舞台として夜に披露された。なお、法印神楽の披露される年は、各浜によっても異なるとのことである。

#### 8月13日～16日 盆棚

8月13日になると、仏間の一角にかけられた十三仏の掛軸の前に、4本の竹とフジのツルを使って盆棚を作った。僧侶からは南無阿弥陀仏と書かれた紙札を2枚もらい、うち1枚をフジツルにつけた。13日の夜と14日の朝晩、15日の朝晩と16日の朝昼に供え物をした。盆棚はオボンサンとも呼ばれた。かつては新築と同時に盆棚も作られた。16日のトウロウナガシでボンブネにのせて流した。

震災前まで、盆棚は組み立て式のものを使用していた。また、話者⑤宅では、盆棚が何十年と使用してきたもので、ぐらぐらしていて危ないということから、仏壇にお供え物をした。震災後の盆棚（2011年8月）は、仮設住宅内では設置するだけのスペースがないため、テーブルの上に板を敷き、その上に位牌と1、2本の花を供え、簡略化して済ませた。

盆棚を拜むのは、自分の家か親族・シンルイのものに限られている。そのため、どこの家でも立派な盆棚が作られているが、みなそれぞれの家でどのような盆棚なのか知らない。

#### 8月14日 棚経

龍沢寺の僧侶が各家を回り、盆棚を前にして「オンマイダレウンバター」と書かれた経を読むとされる。『東北地方の信仰伝承—宮城県の中行事—』では、平成13年（2001）よりこの日に檀家が寺に参集し、合同で棚経を行うようになったとある。

#### 8月16日 トウロウナガシ

ボンブネとも呼ばれていた行事で、18時頃から浜に集まり、盆棚と供え物、また寺からいただいた紙札を舟で海に流した。この紙札はゴシンやセンドウサンと呼ばれた。各家では提灯を廊下に灯し、寺からいただいたボンバタを飾った。町（石巻市街地か？）ではボンバタは購入するものだが、大浜では配られていた。

ポンブネは当初木や小麦ワラが使用されていた。この頃は、流した翌日になると風向きでポンブネが浜川に戻ってきたので、子供たちがフネに乗り供え物の果物を口にしたこともあった。ポンブネは、いつしかダンボールで作られるようになったが、海を汚すことになるとして、ポンブネ自体を流さなくなってしまった。震災前では、実際に海に流すことはせず防波堤の上で火をおこし、それで燃やした。青年会がこれを担当した。なかには、船を実際には流さず紐を結わえて後に回収するという人もいた。ポンブネが流されなくなったのは10年ほど前のことである。ポンブネを流した際、御詠歌も歌われた。

#### 9月26日 コマツリ

コマツリ（戸祭り）の名称通り、各家の氏神の祭典であり、本来はその縁日も各家で違った。近年では統一して行うことになっており、石神社の祭典の時に同時に行われる。石神社祭典では、「(人名)、～神社、」というようにしていた。祈祷されている祭典に出席するのは、大浜地区の約40戸中18戸となる。かつては旧暦9月29日に実施されたが、近年では新暦の9月29日となっている。

各家では多くの場合、各々の氏神を持ち、それを共有することは親族・シムルイであってもないと言われる。ただし、別家であり氏神を持たない家などは、本家に行ってそこの氏神を拝んだこともあるという。

どの家が何の氏神をもつかは、宮司が取り決める。Aさんは、家を新築した際に、方角を直す氏神を祀るため、宮司に頼み氏神を入れてもらった経験をもつ。

#### 10月17日 観音講

1月12日の山の神講と合わせ後述する。

#### 12月8日 ツメノヨウカ、オヨウカ

この日、神様が出雲へと帰る日とされ、早朝に砂糖を入れない小豆粥を作り、神棚へと供え出雲へと行く神を見送った。なお、『東北地方の信仰伝承—宮城県の中行事—』においては「この日神さまは出雲に行くために」とあるが、雄勝町史によると、「地上の厄神が、しばらくの間伊勢へとお上がりになるのだといって祀るのは、2月8日と同じである。これは、地上に在します神々が、一時伊勢へ旅立って留守をする。そのあとへお正月の歳神をお迎えするともいわれている」とあるように、こちらでは神が旅立つのは伊勢であるとされている。本調査時も、伊勢か出雲かで被調査者の間に混乱が見られた。

#### 12月13日 ススハギとマメマキ

今回の調査では詳細を聞いていない。『東北地方の信仰伝承—宮城県の中行事—』では、ササダケで2個の箒を作り、煤掃をするとある。仕事の都合でできない者は、当日ススハギのまねごとをし、他日に行ったという。

その他行事として大正12年（1923）まで、夏の間に三山詣りという行事が行われていた。既に途絶えた行事であるが、震災以前に1度だけ行き、みなで歩いたという。なかには3回ほど行ったという人物もいる。何年前に行ったかは不明だが、震災以前にはどこの家にも三山詣りに用いられたとされる白装束が残っていたという。

#### 山の神講・観音講について

内容は同様のものだが、1月12日に行われているものを山の神講、10月17日に行われているものを観音講という。女性のみが参加する講で、男性はその内容についてはあまり知らない。それぞれ、現在は葉山神社境内に移されている祠の前ののぼりを立て、大浜地区内の女性がそこで参詣する。のぼりを立てるためのパイプは、祠を正面にして前後に2本ずつある。山の神講の際には祠を正面に見て手前左右2本に「山の神」ののぼりを、奥の左右2本に「観音講」ののぼりを立てる。観音講の際にはそれが逆となる。かつては集落中心部分岐点に山の神の祠があったが、道路工事がかつてあった際に現在の葉山神社境内に移される。

行事内容は、葉山神社境内にある祠をメンバー全員で参詣した。参詣が終わると、メンバーで食事会が開かれた。

近年会場となっていたのは地区会館の集会所であった。また、近年では年に1回の外食が開かれていた。単なる年中行事としてだけでなく、女性にとっての正月という意味合いも含まれていた。

#### 加入条件

大浜地区の嫁がメンバーとなっており、各戸から1人ずつ講に参加することになっている。計40人ほどのメンバーがいた。大浜に嫁に来た人間は、その次の講から参加することとなる。たとえば、1月11日にある家に嫁に来た女性がいたら、翌12日の山の神講に参加させられることとなる。それまでその家から参加していた女性は、この時代替わりして講を抜ける。新たに参加することになった嫁は、初回参加時に着物を着せられ、歳頭を介してメンバーにあいさつをする。

#### テエマエ（亭前）の取り決め

大浜地区を3組に分け、それぞれ輪番制でテエマエ（亭前）を行っていた。1組が1月の山の神講のテエマエ（亭前）を務めると、次の10月の観音講では、2組がその担当となった。翌年の1月では、3組がテエマエ（亭前）を務め、というように順番に回っていた。

各組では、テエマエ（亭前）の番になると、組内から1人を選び、その人をヤドマエとした。

各組は、テエマエ（亭前）の時はお膳を作るなどの世話役をした。ヤドマエに選ばれた人の家は、その休憩所とされた。近年では、ヤドマエに選ばれると座敷の掃除をしなければならず、大変だということで、地区会館の集会所をヤドマエとしていた。

#### 観音講（山の神講）の定年

講を抜けるには、その家に新しい嫁が来ることが条件となっているため、新たな嫁のいない家からはいつまでも同じ人が参加することになっている。約15年前からは、雄勝町の各地区で観音講・山の神講に定年を設けることとなった。そのため、大浜でも定年を定めてもいいのではということになり、大浜地区の観音講（山の神講）では60歳になると自動で講から抜けることとなった。雄勝町内の他地区では、定年の年齢を45歳や55歳と定めるところもあるが、大浜の場合、55歳で定年とすると歳頭がいなくなってしまう状況にあったため、他地区より若干高い60歳での定年としている。講を抜けるときは、あいさつなどはせず自然に抜けていった。

#### 震災前の観音講（山の神講）の状況

震災前から、観音講（山の神講）時に参詣する人の人数は減っていた。何のために講をするのかが伝えられておらず、その役割が形骸化していた。講を行う楽しみでもあった地区外での外食等も、近年では多くの人が中学生の子供の部活の応援などで忙しく、またバスを借りて外出すると出費がかさむとして行事参加に敬遠ぎみであった。

震災直前では、講の参加者も12、3人までに減っており、あとはテエマエ（亭前）の人たちだけでのぼりを立て、参詣したらお茶のみをするだけで終わりにしようかという話し合いがされていた。

#### 彼岸と重なる祭典

以前は旧暦9月29日に行われていた石神社祭典ならびにコマツリだが、ギンザケ養殖やホタテ養殖が始まると、浜の仕事で忙しい時期に祭典が行われることになったため、祭典日を新暦9月29日にした。約10年まえのことであった。9月29日は秋のお彼岸の最終日に当たるため、朝は祭典を行い、夕方は彼岸供養をすることになってしまった。なかには、祭典日に法事をする人もいた。

当初は、若者たちは誰しもがおかしいと感じていたが、葉山神社の御神体が薬師如来であり、薬師如来の縁日は彼岸と重なっても不自然ではないという主張が出てきた。他方で、神事と仏事が同時に行われることを嫌がる人も残り続けた。

#### 参考文献

東北歴史博物館編 2005 『東北地方の信仰伝承—宮城県の年中行事—』 東北歴史博物館、84-91 頁。